

大学一年生における漢字単語の読み能力  
—近畿医療福祉大学福祉心理学科  
第一期生から六期生までの比較—

柴原直樹

Ability of University Freshmen to read Kanji Words  
-A Comparison among Psychology Students Enrolled in  
Kinki Health Welfare University from 2004 to 2009-

Naoki SHIBAHARA

Abstract

The purpose of this research was to examine whether there would be differences in the ability to read Kanji words among freshmen enrolled in Kinki Health Welfare University from 2004 to 2009. Psychology students participated in this experiment, and 100RAKAN was used to assess their Kanji reading ability. The results showed that there were no significant differences in the score of 100RAKAN among university freshmen during the six years, together with no gender differences. This suggests that verbal ability of university freshmen has not been changed for six years.

Key words : kanji, reading, 100RAKAN, verbal ability

漢字、読字、百羅漢、言語力

はじめに

言葉とは、人間が世界を認識するための手段であると同時に、その認識結果の証拠でもある(鈴木, 1990<sup>1)</sup>)。その言葉には発話と表記といった別個の表現形態があり、前者は自然に進化したが後者は後天的に人間の頭脳によって生み出された。Chomsky (1957<sup>2)</sup>; 1965<sup>3)</sup>)によると、言葉を話す能力は進化の過程を経て賦与された生得的なものであり、言葉を話す環境に触れることによって言語獲得の遺伝的プログラム、すなわち言語獲得装

置 (language acquisition device : LAD) が作動し、いわゆる母語を話せるようになるのである。まさに Miller (1991)<sup>4)</sup> が指摘したように、自らの思考を外在化し伝達するための信号システムとしての音声言語は人間のみを与えられた生物学的な最高傑作の一つといえよう。

これに対し、書き言葉は話し言葉から派生した二次的なものに過ぎない。このことは、話し言葉を自由に操ることができるが、必ずしも読み書きに精通しているとは言えない人(文盲)が存在することからも理解できよ

う。要するに、発話のない表記は存在しないのである。

他方、澤口(2008)<sup>5)</sup>は両者を進化的に予想している環境(Evolutionarily Expected Environments: EEE)という観点から区別している。人間が言葉を話すようになってから今日までの何十万年という歳月の流れを考えると、人間にとって誕生後に音声言語を経験することのできる環境というものは進化的に予想されるものである。これに対し、文字言語はわずか6000年ほどの歴史しかもたず、したがってその環境は進化的に予想しえるものではない。つまり、「人間が社会生活の中で話し言葉に接して育つ」といった進化的に予想している環境下では、音声言語は自然に身に付くものであるが、文字言語はそれを経験することのできる環境というものが進化的に予想されないため、その習得には教育が必要不可欠となるのである。

このように考えると、人間にとって文字言語の習得に教育の役割がいかに重要であるか理解できよう。特に、日本人は平仮名、カタカナ、漢字といった異なる表記法を習得することが義務づけられており、中でも漢字に関しては音素と書記素が仮名のように一対一の対応関係にないため、両者の関係に習熟するには努力を要する(柴原, 2001参照)<sup>6)</sup>。

ところで、2011年度に小中学校では新学習指導要領に全面移行するが、そこでは「ゆとり教育」の見直しをはじめ、「言語力」の育成等が求められている。同時に、常用漢字において現行の1945文字から追加(191字)・削減(5字)の試案が提出され、音訓の見直しも検討されている。言語力の育成のためにはまず語彙の知識を脳内に定着させ、言葉の持つ形態・音韻・意味情報に自由にアクセスできるようにしなければならない。日本語では、対象を指示する言葉は漢字で表記されること

が多く、したがって漢字を習得することが言語力の育成には不可欠と思われる。逆に、言語力は漢字の習得状況によって推定可能とも考えられる。そこで、近藤・天野(1998)<sup>7)</sup>は漢字テスト「百羅漢」を作成し大学生の漢字単語の読み能力を調べた。彼らは、1410名の大学生によるこの漢字テストの平均得点は55.1点(100点満点)で、高得点者ほど漢字の提示から音読に至るまでの反応時間が短いことを報告している。

本研究では、近藤・天野による漢字テスト「百羅漢」を用いて、(1)本学福祉心理学科第一期生から六期生までの一年次における言語能力を推定すると共に、(2)6年間で新入生の漢字の読み能力に差が生じているか、特に「ゆとり教育」世代(注1)に有意な低下が見られるかどうかを調べる。また、その結果を今後の学生指導の参考にする。

## 方 法

### 被験者

本学福祉心理学科第一期生(2004年度入学)から六期生(2009年度入学)までの学生を対象とし(ただし、2008年より臨床福祉心理学科に学科名が変更)、彼らが全員一年生の時に漢字テストを行った。一期生136名、二期生63名、三期生79名、四期生47名、五期生43名、六期生39名の計407名が参加した。

### 材料および手続き

近藤・天野(1998)<sup>7)</sup>による漢字単語の読み能力テスト、百羅漢(100 RAKAN: Reading Ability test for Kanji words)を使用した。この漢字テストは100語の漢字単語から成り、それぞれの漢字単語は、(1)漢字のみで表記され、(2)同字異音語や同音異義語を持たず、(3)単語親密度(天野・近藤, 1999)<sup>8)</sup>

が文字提示で4.0以下、音声提示で4.5以上であるという条件を満たしている。

漢字テストは一年次履修科目「学習心理学」の授業中に行い、被験者にはこれら100の漢字単語の読みを「平仮名」で制限時間内（10分間）に記述するよう指示した。

## 結果

漢字テストの得点は、一単語正解につき一点が加算され、全問正解で100点となる。近藤・天野（2001）<sup>9)</sup>に従い、漢字テストの得点が15点以下のデータは解析から除外した。15点以下の被験者は、一期生8名（男性6名、女性2名）、二期生4名（男性3名、女性1名）、三期生0名、四期生から六期生まで各1名（男性のみ）の計15名（男性12名、女性3名）であった。その結果、全被験者の96.3%がデータ解析の対象となった。

表1に一期生から六期生までの合計得点の平均値と標準偏差、および比較のために近藤・天野（2006）<sup>10)</sup>による高校生、短大生、大学生の平均値と標準偏差を示す。

表1 本学および近藤・天野（2006）による百羅漢の得点の平均値と標準偏差

| グループ別 | 本学   | 近藤・天野（2006） |      |      |
|-------|------|-------------|------|------|
|       |      | 高校          | 短大   | 大学   |
| 人数    | 392  | 61          | 102  | 1650 |
| 平均値   | 45.9 | 39.0        | 46.7 | 53.9 |
| 標準偏差  | 17.0 | 17.0        | 17.4 | 16.2 |

近藤・天野による大学生の平均値が本学のものとは8点も高いのは、前者のデータには大学生のみならず大学院生の得点も含まれていたことが原因と思われる。また、漢字テストの対象が本学では大学一年生であったことを考慮すると、近藤・天野による短大生（専門学校生も含む）の平均値とほぼ等しいことも頷ける。

次に、表2に本学第一期生から六期生までの得点の平均値と標準偏差を示す。

表2 一期生から六期生までの百羅漢の得点の平均値と標準偏差

|      | 一期生    | 二期生    | 三期生    | 四期生    | 五期生    | 六期生    |
|------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|
|      | (入学年度) | (2004) | (2005) | (2006) | (2007) | (2008) |
| 人数   | 128    | 59     | 79     | 46     | 42     | 38     |
| 平均値  | 46.4   | 41.8   | 47.9   | 46.0   | 48.6   | 49.2   |
| 標準偏差 | 13.6   | 14.7   | 13.1   | 15.4   | 16.4   | 17.4   |

二期生の得点が他に比べて低く六期生が一番高かったが、一期生から六期生までの得点間に有意な差は見られなかった( $F(5, 386) = 1.828, p = .106$ )。また、ゆとり教育世代(四期生から六期生まで)とそれ以前の世代(一期生から三期生まで)との間に得点の有意差は見られなかった( $t_{390} = 1.27, p = .204$ )。

また、一期生(2004年度入学)から六期生(2009年度入学)までの男女別の得点結果をグラフに示す(図1参照)。

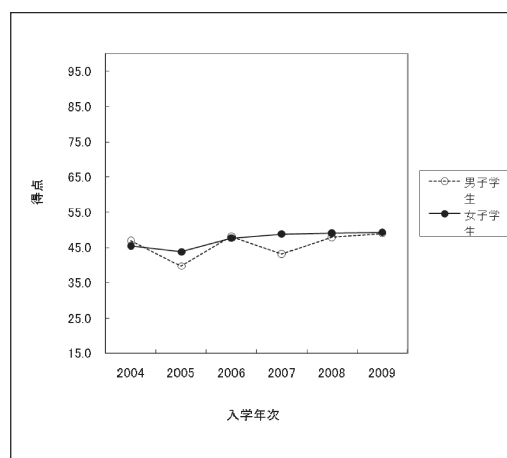


図1 一期生（2004年度入学）から六期生（2009年度入学）までの百羅漢の男女別得点

一期生から六期生にわたって男女差があるか調べるために、6（入学年度）×2（性別）の分散分析を行った。その結果、入学年度( $F(5, 380) = 1.815, p = .108$ )および

性別 ( $F(1,380) < 1$ ) の主効果は見られなかった。また、両者の交互作用も有意ではなかった ( $F(5,380) < 1$ )。

## 考 察

少子化に起因する大学全入時代の到来とあわせて「ゆとり教育」による学生の質の低下が懸念される今日、大学教育のありかたについて議論され多くの提案がなされてきた(寺崎, 2006参照)<sup>11)</sup>。このような状況の中、本学においてもこの数年間で学生の資質の変化を感じるようになってきた。この変化は言語能力にそのまま反映されるのではないか、特に「ゆとり教育」世代で顕著な言語力の低下がみられるのではないかと考えて、言語能力を推定するための漢字テスト「百羅漢」を福祉心理学科の新生を対象に6年間に亘って行ってきた。

データの分析の結果、一期生から六期生までの間に漢字テストの得点差はなく、男女間にも有意差は見られなかった。特に「ゆとり教育」による漢字力低下が検出されなかったのは、ある意味では驚きであった。漢字検定の受験者が年々増加の傾向にあることから(注2)、一般に漢字に対する興味や関心が深まっていることが推測できるが、本学の学生もこの影響を受けているのかもしれない。また、近藤・天野(2006)<sup>10)</sup>による10代(18歳~19歳)の平均得点(47.2点)と本学の学生の平均得点(45.9点)との間に顕著な差は見られなかった。

近藤ら(2008)<sup>12)</sup>は、20歳未満の大学生を対象に「百羅漢」の得点とWAIS-III<sup>13)</sup>における言語理解群の3つの下位検査である「単語」、「類似」、および「知識」の得点との間に相関があるか調べたが、「百羅漢」と「類似」および「知識」との間には有意な相関は

認められなかった。このことは、百羅漢の得点が高い(あるいは低い)からといって、類似判断や一般的知識も同様に低い(あるいは高い)ことを意味するものではない。したがって、本学福祉心理学科の一期生から六期生に亘って百羅漢の得点に変化が見られなかったからといって、彼らの一般的な知識量や論理的・範疇的思考力も同じレベルにあるとは断定できない。

今後の課題としては、新生が卒業するまでの4年間で百羅漢の得点がどの程度増加しているか調べることで言語能力の向上について検討することが挙げられる。また、高齢者(65歳~84歳)の場合、「百羅漢」と「単語」、「類似」、「知識」の得点間に有意な相関がみられたという近藤ら(2008)<sup>12)</sup>の報告を考慮すると、4年次の百羅漢の得点とWAIS-IIIの単語・類似・知識の得点との間に相関が認められか調べるのも課題の一つと考えられる。

## 引用文献

1. 鈴木孝夫：日本語と外国語。岩波書店，1990
2. Chomsky, N.: Syntactic structure. The Hague: Mouton, 1957
3. Chomsky, N.: Aspects of the theory of syntax. Cambridge, MA: The MIT Press, 1965
4. Miller, G. A.: The Science of Words. New York: W. H. Freeman and Company, 1991
5. 澤口俊之：脳教育2. 0-子どもに最も必要な能力HQ。講談社，2008
6. 柴原直樹：漢字の読字過程に及ぼす諸変数について—英語との比較検討—。追手門学院大学心理学論集，第9号，53-61，2001

7. 近藤公久・天野成昭：漢字単語の読み能力テスト：単語親密度を利用した言語能力の推定法。日本心理学会第62回大会，1998
8. 天野成昭・近藤公久：日本語の語彙特性 第1巻 単語親密度 NTT データベースシリーズ。三省堂，1999
9. 近藤公久・天野成昭：漢字単語の読み能力テスト「百羅漢」の得点傾向。日本心理学会第65回大会，2001
10. 近藤公久・天野成昭：漢字単語の読み能力テスト「百羅漢」の項目分析。日本心理学会第70回大会，2006
11. 寺崎昌男：大学は歴史の思想で変わる－FD・評価・私学－。東信堂，2006
12. 近藤公久・伊集院睦雄・天野成昭：百羅漢の得点から見た言語能力の加齢変化。日本心理学会第72回大会，2008
13. 日本版 WAIS - III 刊行委員会訳編。日

本文化科学社，2006

注1

「ゆとり教育」とは、学習内容や授業時間の削減、絶対評価や総合的学習時間の導入などにより、過熱する受験競争や詰め込み教育を回避することを目的として生まれた教育制度のことで、2002年に全国の小中学校、2003年に高校で始まった。「ゆとり教育世代」とは、一般に義務教育（初等・中等教育）の課程において、この「ゆとり教育」を受けた世代のことをいう。

注2

平成15年度から20年度までの6年間の漢字検定受験者数は、2,195,595人、2,240,344人、2,407,075人、2,640,812人、2,716,711人、2,893,071人と年々増加傾向にある。